

日本IT書紀

201 鳳仙花

10 迅風篇
卷之二十七 連屬

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第二百一

鳳仙花

一

表題から読者が連想するのは、よもや中島みゆきという歌姫が作ったレクイエムではあるまい。釣舟草科の植物であって、初夏から秋にかけて赤や紫の花を可憐につける。

学名は「インパチエンス・バルサミナ (Impatiens Balsamina)」、英語名は「Impatiens」または「touch me not」。熟した果実に触れると種子が勢いよく飛び散る。「あたしに触らないで」とは、何ともうまい名前ではないか。情報サービスマンでも、鳳仙花のごとき状況があった。そのいくつかを書く。

北川宗助が創業した日本ビジネスコンサルタント (NBC) が日立製作所の傘下に入ることが決定的となった一九六六年、それを受け入れることに甘んじえなかったのは大久保茂だけではなかった。一人は柳田稔といい、もう一人は尾崎眞民といった。

ここまできて言うのも何だが、筆者はいずれ「スピンアウト」というタイトルの節を設けることにしている。「スピンオフ」という言葉もある。どちらも同じような意味ではないか、という指摘は事実正しい。なるほど、似たような意味である。ということとは、微妙に違うということでもある。

いまさらながらだが、スピンとは猛烈に回転するさまをいう。つまり意味の違いは「アウト」と「オフ」にある。「アウト」は異なる意思と意思がぶつかり合って、一方が飛び出るさまをいう。喩えていえばベーゴマの戦いに等しい。

一方の「オフ」は、成行きの中で一定の意思を持った人が新しい天地を求めるさまをいう。史上例を挙げればメイフラワー号で大西洋を渡ったピューリタンがそれに当たるかもしれない。

独立の動機が

—NBCが日立の傘下に入るのがシヤクだったから。

という柳田と尾崎は紛うことなく「オフ」であるに違いない。大資本のゴリ押しに反発したのであれ、自分たちが手塩にかけて築いた砦が乗っ取られることに異を唱えたのであれ、新天地を求めたことは間違いない。

柳田稔は日本ビジネスコンサルタントの大阪支社に勤めていた。担当したのは日本道路公団の交通量調査である。

これは神戸―名古屋を結ぶ日本初の高速道路「名神高速道路」を建設するための予備調査だった。

街道を行く車両が向かう先はどこか、車種は何か、何を運んでいるのか、移動の目的は何かといったことを調べ上げる。

それを集計し道路公団に報告するために彼は専用のパンチカードを設計し、それに沿った調査票を作った。これを街道の各所で運転手に渡し、あるいは回収した。

結果、東海道北回りルートが採択され、尼崎―粟東間七十一・一キロが六三年七月に、粟東―小牧間が六五年七月にそれぞれ完成した。

だが調査はそれで終わらなかつた。インターチェンジを新設したり休憩場所や給油所を配置するのに、交通量調査が欠かせなかつた。高速道路を降りた車両が最終的にどこに向かうのかを知らなければ、在来国道の整備計画が成り立たない。

NBCが変調をきたしたとき、柳田は道路公団に

——交通量調査の仕事を円滑に継続するには、自分が責任をもって運営するほかない。

と訴えた。

——やむを得まい。

公団は言った。

柳田は急遽、新会社の設立に向けて動き、一九六六年のこと、資本金百二十万円をもって大阪市にオフィスを開いた。社名は「ワールドビジネスセンター株式会社」といった。

——「日本」より大きい名前をつけた。

後年、柳田は冗談交じりに語ったが、実は半分は別の意味合いがあつた。そのことを語るのは、柳田のあとを受けて社長に就任した池田達夫である。

「会社を作る前の年、柳田さんは日本生産性本部が主催した洋上研修会に参加したんです。そのとき、アメリカにはソフトウェア・パッケージというものがあつて、それを開発し販売することで利益を上げている会社がたくさんある、ということを知った。むろん、北川さんや大久保さんが現地で見聞きした話を聞いたのが刺激になったでしょう。よし、オレもそういう仕事で世界に飛び出そう、と考えた。それで「ワールド」という社名にしたんです。創業した直後も毎年、一回か二回はアメリカ視察に行っていました」

ただこの「夢」はただちに実現しなかつた。基盤を固め、資金的な余裕を確保しなければならなかつた。ノベルというベンチャー企業が開発したネットワーク用ソフト「ネッ

トウエア」を自分の目で発見し、いち早く日本に紹介したのは一九八〇年である。オフィス用のLANやグループウェアの先駆けとなったことは周知であろう。

尾崎眞民は北川学校の生え抜きである。

中央大学の学生だったとき、アルバイト募集の広告を見てアメリカ軍立川基地のPC S（パンチカード・システム）部隊で使い走りをした。紙カードを運んだり、プリンター用紙のカーボンを外すという力仕事を中心だった。アメリカ兵と比べるとはるかに背が低く童顔だった。はじめは「ボーイ」「ボーイ」と呼ばれたが、そのうち北川宗助が「ハンフリー」というあだ名を付けた。苦みばしったニヒルな役が似合ったハンフリー・ボガートの真反対なことを、皆が面白がったのである。

立川基地の縮小に伴って北川宗助が島村浩と一緒に日本ビジネスを設立したとき、北川に従って移籍した。そこで尾崎はオート三輪を運転して国産のパンチカードをユーザー先に届けるかたわら営業を担当した。

日本ビジネスは計算機を使うことを前提に経営改善や組織改革を指導するのが本業だったが、そのためには仕事の流れを分析し、それをワークフローに落とさなければならぬ。すなわち、のちにいう業務分析でありシステム設計

である。

NBCではシステム部に所属し、一人前のシステム・エンジニアとして仕事をしていた。システム部が日立製作所に移管されることが本決まりとなったとき、

「何となく面白くなかった」

と尾崎は言う。

「見通しもないままに飛び出して、気がついたら会社を作っていた。いまから思うと無茶な話だった」

設立した会社の名は「株式会社インフォメーション・デイベロプメント」(ID)、設立時の資本金は三百万円、社員は女子パンチャー十人と出資者四人だった。

〇〇計算センター、〇〇システム開発、〇〇パンチセンターといった名称が多かった当時、こういう洒落た名前を付けたのは立川基地で体得した英語の知識があったからである。

目論見もないままスタートしたIDは、設立から二か月後、日本テレビから選挙速報用のデータ入力業務を受託することができた。翌七〇年には安田信託銀行からテレック用紙テープのパンチ業務を請け負った。

七三年にはパンチ業務が広がったことを受けてデータサービス部を二部に分割した。顧客は安田信託銀行のほか、日本経済新聞社、日刊工業新聞社、農林中央金庫、博報堂

などだった。創業のとき六台しかなかったパンチマシンは百十七台に増えていた。

「それでもマシンが足りなくなり、日本テレビのマシンを使わせてもらったこともあった」

と言う。

七四年、パンチマシンを最新式のキーボードディスク装置に入れ替えた。この年にはマシン・オペレーションを行うFM事業本部が軌道に乗り、併せてソフトウェア開発部門が発足した。ソフト開発の取引先は川崎製鉄、三井情報開発、安田生命、労働省などである。

「コンピュータ・メーカーや大手の情報サービス会社を経由しての仕事も少なくなかった。しかしユーザー企業とダイレクトに契約するという基本方針から大きくぶれないように、常に心がけていた。結局これがデータ入力、システムズ・オペレーションの事業にも貫かれた」

ユーザー指向の考え方は株式を公開した現在も変わっていない。

三

七〇年代に入って興隆したのは制御システム向けソフトウェアの分野だった。一九六九年十一月にDEC日本支社

からスペインオフして設立されたアンドールシステムサポートという会社がある。

二〇〇五年三月現在の本社は東京都品川区南品川二の一五の八、資本金は九千九百万円、従業員は八十名、売上高は十四億円。主要業務は通信・画像・制御物流等システム開発、マイコン応用OEM製品開発、マイコンエンジニアの教育養成、開発支援ツールの開発・販売である。

七三年の時点で資本金は一千万円、従業員は約六十人、売上高は二億円という状況だった。従業員数が二割ほど増えただけなのに売上高が七倍というのは、つまるところ「付加価値」を高める努力の結果というほかはない。

当時の様子を「情報産業新聞」（七三年六月十三日付）は次のように伝えている。

「ユーザーが望むコンピューター・システムの最適化をめざし、プロジェクトに参画するすべての人間のANDがあるいはOR的関係と調和を図り、つねに新しいシステムの実現を使命としてコンピューターエージをリードしていく」のが社名の「アンドール」の意味。

記者の感覚で分析すると、おそらくこの部分は、同社の会社概要からそっくり持ってきたのに違いない。つまり文

科系の人が書く文章ではない。要は「AND・OR」を一つの単語として読むと「アンドール」になる、という説明である。

同紙の記事は以下のように続く。

ミニコンのIBMといわれるDECの日本支社で第一線のエンジニアとして活躍していた三田輝、堀越健治、杉山紀元、多田碩佳の「四人のサムライ」が、四年前の四十四年十一月に独立、ミニコンピューターの分野で、特に自動制御、通信、計測分野のシステム開発を目的に設立した。

業務は順調に伸び、設立六か月後の四十五年五月にシステム技術部を新設。コンピューター・ソフトウェアの開発に加え、コンピューター・インターフェースの設計、製作に乗り出し、昨年八月、本社六階にコンピューター・システム開発室を開設した。

創立者の三田輝社長は、ミニコンの第一号といわれているPDP・8/Sが出る前からミニコンにたずさわっていた人で、初期のミニコン導入企業九十社のソフトウェア開発、最適システム開発を手がけたミニコンの草分け的存在。これまでに開発したプログラムは二百本ほど。「内外のミニコン二十五機種をこなしてきた」だけに、ユーザーの信頼も厚い。

「中立の立場でユーザーの求める最適システムを開発して提供していく。コンピューター・メーカーや商社でもできないユーザーの要求するものがあるはず。あくまでもユーザーの立場に立つてバランスの取れたシステムは何かを考え開発する」

ミニコンだけでなく中型コンピューターのフォートラン・ベースによるソフトウェア開発も手がけているほか、マイクロコンピューターの先駆者であるインテル社と提携し、マイクロコンピューターの実用化技術を開発するなど、同社のソフトウェア技術力は内外で高く評価されている。

ウーン、言わんとすることは分かるが、とてもとても「うまい」とはいえない。何となれば同じ意味の文章が繰り返され、少しも詳細な実態が伝わってこないからである。

——書き直して来い！

と突き返されること間違いないのだが、記者（ないし編集者）にも弁護の余地がある。それはこの当時、ミニコンというものの役割が専門記者にすら十分に理解されていなかった。全く新しい分野だったということだ。

まして「マイクロコンピューター」「インテル」という言葉は、旧来型の事務計算用コンピューター・システムを追いかけている記者には初耳に近かった。

そのような状況の中でマイコン応用システムの分野に足を踏み出したこの会社は、ある意味で先駆的なベンチャーだった。以後、受注型から提案型に転じ、大手電機メーカーに自社の技術を売り込みにいった。

折から公害問題がクローズアップされており、排水や大気の有害物質を検出するセンサーが求められていた。マイコンを組み込んだ監視装置を作ったところ、これが売れた。

ミニコンを使った電力系統の監視装置、製鉄ラインの検査システムなど次々に受注があった。八三年四月には東京・品川に自社ビルを建設、九〇年代に入ってリアルタイムOSの開発や画像処理システムで成長した。コンピュータ、ソフトウェア、ネットワークの融合が社会を変えていく端緒を作った。

さらにいえば、ハードウェアでもない、ソフトウェアでもないという意味で「マイコン応用システム」という言葉が生まれ、それを開発するという意味で「システムハウス」という呼称が誕生した。アンドールシステムサポートその源として、こんにち記憶されるべき企業になった。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

大久保茂 おおくぼ・しげる／1921〜2007。一九四二年横浜商業専門学校を出て四六年連合国軍総司令部鉄道司令部に入り人事を担当した。のちアメリカ軍立川基地に移り六一年日本ビジネスコンサルタントに入った。六六年コンピュータアプリケーションを設立した。

ペーゴマ 十世紀ごろ、九月九日の重陽の節句に巻き貝を半分に切り、その中に鉛やロウを詰めて独楽にし、ぶつけ合って吉凶を占った。貝の独楽ということから「バイゴマ」と呼ばれた。裏側にある渦巻き模様は巻き貝を使った名残。のちに床(トコ)と呼ばれた土俵の中にペーゴマを入れ他のペーゴマを外にはじき飛ばした者が負けた者のペーゴマをもらえらる遊びとなった。明治になつて鑄鉄製のペーゴマが作られ、子どもの遊びとして東京から全国に広がった。第二次大戦中は瀬戸物やガラスが使われた。

名神高速道路 愛知県小牧市から岐阜、滋賀、京都、大阪を經由して兵庫県西宮市へ至る高速道路(高速自動車国道)で、東名高速道路とは小牧ジャンクションで本線が直通している。ガインターチェンジが通し番号であるため、事実上一本の高速道路路として使われている。

北回りルート 古来の東海道は西から、難波を起点に生駒を越えて奈良盆地に入り、初瀬山を右手に見つつ伊賀の山中を抜け、鈴鹿に出る。ここで伊勢街道と合流し、海沿いに桑名を経て名古屋にいたる。京都・五条大橋を起点とするようになったのは室町に幕府が置かれたころと考えていい。

ノベル社 一九八〇年「ノベル・データ・システムズ」の名で設立され、八三年「ノベル」に社名を変更した。LANに対応したネットワーク・ソフトウェアを開発し、八〇年代に「ネットワークOS」の概念を確立した。主力製品「ネットワーク」はLANの標準システムになった。

ハンフリー・ボガート Humphrey Bogart／1899〜1957。ニューヨークに生まれ、医学予備校に入ったが中退し海軍に入った。第一次世界大戦に動員され戦闘中に負傷して上唇が部分的に麻痺した。このために喋り方が舌足らずになり、後にこれが彼のトレード・マークの一つとなった。代表作は『マルタの鷹』(四一年)、『カサブランカ』(四三年)、『アフリカの女王』(五一年)など。「ボギー」の愛称で知られた。

DEC日本支社 六三年九月に理経産業と提携した際、デジタル・イクイップメント社のコンピュータについて日本側の輸入手続き事務や技術管理などを行う目的で設立された。外資一〇〇%出資子会社が規制されていたため、独立した企業でなく、駐在事務所という扱いだった。

三田 輝 みた・あきら／1935〜…早稲田大学理工学部を出て理経に入り、デジタル・イクイップメント社のPDPシリーズのプログラム開発を行った。マイクロコンピュータに着目しアンドールシステムサポートを設立、七五年「マイクロコンピュータ普及協議会」の設立に尽力し会長、のち日本システムハウス協会会長を務めた。「システムハウス」「ファームウェア」という言葉を認知させるとともに、マイコン応用システムの独自製品開発を推進した。

PDP-8 十二ビットプロセッサで動作し、シングルタス



ク・マシンだった。IC技術とコアメモリーが使われており、一万ドルを切る価格で売られた。メインフレームの入り込めないプロセス制御、データの集配信など分散処理用コンピュータの先駆的役割を果たした。本文は引用ママの「PDP・8」だが、正しい表記は「PDP-8」である。

# 日本IT書紀 201 鳳仙花

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。